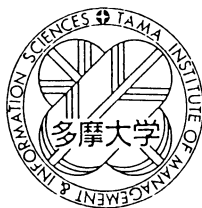


多摩大学の1000日

野 田 ・ 夫
中 村 秀 一 郎



目 次

はじめに.....	7
TIMIS — 1 狭き門より入れ	8
— 2 keep TIMIS Clean	9
— 3 café timis	10
— 4 惜しまれつつ	11
— 5 多摩大学総合研究所の目指すもの	12
— 6 たった一回の人生	13
— 7 知之者・好之者不如樂之者	14
— 8 真の産学協同に向って	15
— 9 苦情でなく提案を	16
— 10☆十字路に立つ大学(その一)	17
— 11☆十字路に立つ大学(その二)	18
— 12 学部ないし学科新設構想	19
— 13 Some 17 years olds go to Paris to.....	20
— 14 深夜の遡航	21
— 15 知識と表現力	22
— 16 開学式典後の2大工事	23
— 17☆ネットワーク型研究組織	24
— 18 バッハをショパンのように.....	25
— 19 憂うべき求人競争	26
— 20☆私語をどうする(その一)	27
— 21☆私語をどうする(その二)	28
— 22 TIME IS MORE THAN MONEY	29
— 23 TIMIS 会員 600 名	30
— 24 シンガポールの教訓	31
— 25 パールマンを聴きながら	32
— 26 “高齢化”と教育	33
— 27 学長の仕事	34

— 28	高齢しか遣しえぬもの	35
— 29	Rapport 通算 100 号 — 会員名簿作成へのご協力のお願い —	36
— 30	游 於 藝	37
— 31	読書の秋	38
— 32	横山寛彰君の死を悼む	39
— 33	現代の若者たち	40
— 34	“ブーム”の中で..... ..	41
— 35	ことばの重み	42
— 36	“麦畑”現象	43
— 37	驚いたことにUFOが..... ..	44
— 38	“利休の年” 逝く	45
— 39	新年は「卒業」から	46
— 40	☆KASTの誕生	47
— 41	☆再びKAST	48
— 42	☆技術と技能	49
— 43	学長の鈴	50
— 44	Hanako のおかげで..... ..	51
— 45	早治大学唯野教授	52
— 46	老いてなおジャンヌ・モロー	53
— 47	海図なき航行	54
— 48	憂鬱な季節	55
— 49	“海の都” の教訓	56
— 50	規模の不利を超えて	57
— 51	道は果てしなく遠くとも	58
— 52	開学一年を顧みて	59
— 53	21世紀を拓く	60
— 54	學問要從非學問來	61
— 55	“退学勧告” をめぐって	62
— 56	教育とは何か	63

— 57 競争の精神	64
— 58 今 なぜか多摩大学が.....	65
— 59☆東欧の脉から	66
— 60 ギャラクシー賞	67
— 61☆ハンガリーの経済・経営学者たち	68
— 62 16日 18時10分	69
— 63☆多摩大の敵は多摩大である	70
— 64 Ask not what your country can do for you, ...	71
— 65 時は移ろい、人変らず	72
— 66 喜んでばかりはいられない	73
— 67 君は 坂の上に 雲を見るか	74
— 68 TIMISの壁	75
— 69 再び「多摩大の敵は多摩大」	76
— 70 われ思う、故にわれ在り	77
— 71 上岡龍太郎の話芸	78
— 72 ブリスベンで考えること	79
— 73 天城会議	80
— 74 コミュニティカレッジ発足	81
— 75 青年よ大志を抱け	82
— 76 排すべき“閉鎖性”	83
— 77 ネットワーク・パワー	84
— 78 3先輩に脱帽！	85
— 79 鼓腹撃壤の気分	86
— 80☆モスクワ大学 ビジネススクールにて	87
— 81☆モスクワ—何が変ったか—	88
— 82 広報努力空しからず	89
— 83 中国とモナコ	90
— 84☆Voice 調査委員会	91
— 85 二通の手紙	92
— 86 教え甲斐のある学生	93

— 87	品格と表現力	94
— 88	THE ENIGMA	95
— 89	春の時代を迎える大学	96
— 90	多摩大学の光と影	97
— 91	今年の主役は学生だ!	98
— 92☆	大学設置基準の大綱化	99
— 93	理想は遠のいていないか	100
— 94	41歳寿命説	101
— 95	そんな少年よ	102
— 96	内は福、外は鬼?	103
— 97	衰れなるかな“生涯現役”	104
— 98	“良い・悪い”から“好き・嫌い”へ	105
— 99☆	大学設置制限への疑問	106
— 100	アッシー・メッシーの時代	107
— 101	パラダイム変換	108
— 102	コミュニティ・カレッジ '91	109
— 103☆	ボイス（学生の声）調査の所見	110
— 104	“大量留年”に想う	111
— 105	第3回入学式	112
— 106	怒鳴り合い	113
— 107	2冊の本	114
— 108	阪神タイガース	115
— 109	飽食と飢餓	116
— 110	燃えつきて	117
— 111	いたずらにすまじきもの	118
— 112	アスペンを想う	119
— 113	時代は“多摩紀”	120
— 114☆	夏休みの勧め	121
— 115☆	地域からみた企業者活動	122
— 116	3種類の卒業生	123

— 117	東京夢幻図絵	124
— 118☆	東南アジアの日本企業	125
— 119	偏差値を考える	126
— 120	男も愛嬌	127
— 121	花数寄	128
— 122	例の仲間	129
— 123☆	東南アジア大都市交通	130
— 124	ひとつの不条理	131
— 125	今、縄文ブーム	132
— 126	大学史はついに.....	133
— 127	成功の甘いワナ	134
— 128	石井和子さんのこと	135
— 129	移ろいやすきは人の心	136
— 130	当世就職事情	137
— 131	上々のスタート	138
— 132	人はオカシクあるべきだ	139
— 133	りえ・エフワン・学園祭	140
— 134	山気佳日夕	141
— 135	Miss Saigon	142
— 136	万里の長城	143
— 137	永平寺 晩秋	144
— 138	それぞれの青春	145
— 139☆	本田宗一郎さんを偲ぶ	146
— 140☆	ファッション・ファクトリー・ブテック	147
— 141☆	コミュニティ・カレッジの明日	148
— 142	栄華の巷・儉安の夢	149
— 143	第2の創業期	150
— 144	レニ・リーフェンシュタール	151
— 145	親の心子知らず	152
— 146	“いき”と“獣性”	153

— 147	新しいトビウオ	154
— 148	リーダーの今日の条件	155
— 149☆	「学ぶコミュニティへの発信 自由人・専門人 そして市民」	156
— 150	Other People's Money	157
— 151	多摩大はまだ目覚めない	158
— 152	希わくは惜しまれつつ	159
— 153	一流ホテルで一流の講義を	160
— 154	鈴屋の入社式	161
— 155	小さなスペース，大きな友垣	162
— 最終号	けふもまたころの・・・	163

(注) ☆印は中村秀一郎が執筆致しました。

おわりに	164
------------	-----

ハガキ通信 TIMIS は、多摩大学学長室より TIMIS 会員に対して毎週金曜日に発送されております。ご意見、ご提案、あるいは新規入会の件等々で事務局にご連絡されたい場合には、何卒下記へお願い申し上げます。

住 所	多摩市聖ヶ丘 4-1-1 (〒206) 多摩大学学長室 TIMIS 係
電 話	0423 - 37 - 7141
F A X	0423 - 37 - 7103

はじめに

野 田 一 夫

この小冊子は、平成元年4月14日より同4年4月3日まで約3年にわたって、毎週金曜日にTIMIS会員に対して小生（または中村秀一郎氏）よりお送りしたハガキ通信TIMIS 156週分を集成したものです。TIMISは申すまでもなく多摩大学の英文名の略ですが、上記期間中このハガキ通信を定期的に購読される方々（TIMISの会会員）こそは、卒業生のいない新設の多摩大学にとって最も大切な精神的後援者でした。したがって、何事につけ多摩大学に関して起ったことや私どもが考えていること等を毎週お報らせしたり、ご理解をいただき、また時にはご批判を仰ぐことが、TIMISの目的でした。

このハガキ通信の前身はRapportと呼ばれておりました。Rapportは、小生が多摩大学の設立の責任者であった2年4カ月のうちとくに多忙であった後半の期間、次第に増加していく関係者・協力者の方々に対して毎週火曜日にお送りしつづけた往復ハガキ通信でした。したがって、本書とともに「多摩大学設立の歩み」を併読して頂きますと、多摩大学開学以前から開学後に至る4年半、責任者が何を考え、何をなし、また何をなそうとしていたかが、よく理解して頂けるものと信じます。

小さいながら大きな理想を持って発足した多摩大学ですが、日本の大学の因習を打破するような形で私共がつぎつぎに打出した施策は逐一マスコミによって報道されつづけた結果、本学に対する世間の評価と知名度だけは驚くほど高まりました。しかし、こうした場合、えてしてイメージと実態との格差はひろがらざるをえません。私どもは、多摩大学の現状に決して満足することなく、常に自らを戒め、地道に所期の理想の実現を目指し努力をつづける所存です。

狭き門より入れ

各 位

野 田 一 夫

この10日「パルテノン多摩」で多摩大学と同附属 高校合同の「入学のつどい」が行われました。冒頭のスピーチで小生は、新入生諸君に対して希いをこめて、聖書マタイ伝の中にある「狭き門より入れ」の言葉を贈りました。

小さい多摩大学は大きな理想を掲げて出発しました。この理想を最も簡潔に表現すればそれは「21世紀を拓く」という七文字に集約されます。20世紀は人類の歴史において最も充実した時代でした。前半2度にわたる大戦が世界の多くの人々に災禍をもたらしたものの、科学技術の進歩、経済の繁栄、国際協調体制の整備……といった成果には素晴らしいものがあったからです。しかし所詮は人間のなせる業、何かにつけて成功は成熟を生み、成熟は頹廃を導きます。成功の20世紀も世紀末を迎えた現在、頹廃の様相は否定すべくありません。政治的腐敗の進行、社会的無気力の蔓延、国際的摩擦の増大……、20世紀はこれら全てを好ましからざる遺産として、21世紀に残す筈です。

とすれば、21世紀を20世紀に劣らぬ輝かしい世紀として拓くために必要な人間的属性は、練磨された知性と肉体だけではありません。真に必要なものは、理想に燃え、進んで艱難と戦う強い意志をもった人材です。多摩大学は実にこういう頼もしい人材を育てようとして設立されたのです。このため、古い歴史をもち、20世紀にどっぷりつかった名門大学が、もろもろのしがらみの故に望んでもできない革新的措置や行動を、新生の多摩大学はどしどし実行に移していきます。

ただ問題は学生側の対応でありましょう。多摩大学の創設者として小生が今切に心に念ずるのは、私共の期待に応え、彼らが理想のために進んで艱難に挑戦し、壁にぶつかっても決して他人を責めない崇高な精神の持主に育ってくれることのみです。

Keep TIMIS Clean

各 位

野 田 一 夫

多摩大学の校舎建設工事はようやく最終段階を迎えました。内装・外構工事もほぼ終り、あとは植栽工事を残すのみです。教職員にも、学生にも校舎の評判は上々のようで、責任者としてホッと胸をなで下しています。でき上ってみると、スポーツ・アリーナは予想以上に大きな空間であるばかりか、雰囲気そのものがいかにも洗練されているではありませんか。

3～4階をカーブのあるしゃれた階段で結んだ図書館も、受付、ラウンジ、閲覧室ともゆとりがあり、あかぬけしていて、そして使いやすそうですが、何といてもインテリアと設備に凝りに凝ったキャフェテリアは圧観で、必らず多摩大生の自慢の場所になる筈、そのオープンが待たれます。個室を排しパーティションを使って高級オフィス風につくられた研究室も、教員の方々には喜んで頂いていますから、このスタイルがこれからは日本の他の大学にも普及していくでしょう。

ところで問題は、このように美しくでき上った建物をどうやって美しく保っていくかということです。何しろ 12,800 m^2 の延床面積の室内空間は広すぎて、基本的には専門業者の知識・技術・労力に依存せざるをえないのは当然です。しかし、大学の予算にも限りがありますから、清掃のために過大な出費はできません。そこで是非実行に移したいのが、ボランティアによる清掃を目ざすK T C (Keep TIMIS Clean) 運動です。

中村学部長や日下教授のように教員の中にもすでに趣旨に賛同して参加を申込まれた方もいますが、近く学生にも呼びかけ、各人があいている時間、お揃いのファッションブルなスポーツウェアの制服に着がえ、専門業者に協力して、校内はもとより、周辺まで、環境美化につとめようというわけです。近く詳細を発表致しますので、奮ってご参加下さい。

café timis

各 位

野 田 一 夫

お気づきになりましたか？ *TIMIS* の先号で多摩大学の誇る食堂 “café timis” について小生が記した文章のくだりで、“圧巻” という言葉が“圧観”と誤って印刷されていました。それを見つけて恐縮するやら苦笑するやらでじっと“圧観”という字を見つめているうちに、この新語もなかなか味があるように思えてきました。

“café timis” の内装工事は昨日（4月24日）完了し、夕刻業者から引渡し式が行われました。工事中週2回程度は見えて廻っていた場所ですが、こうして化粧が終って見わたしてみると、その内装はたしかに圧観(?)です。日本では大学はもとより、官庁も病院もひどく“食堂”を軽視してきました（会社ですら10年ほど前までは同じでしたが…）。欧米人が驚くほどのインテリア感覚の貧しさ、食事の不味さ、サービスの低さが当り前のようにまかり通ってきたのです。とくに大学の“学食”は一般にひどいもので、日本のエリートは毎日毎日このような鬱屈気の中で食事をしてもみじめな気持ちにもならないタフな神経の持主に育てられてきたと思われます。

しかし結果としてそのことが、日本が“国際化”とか“文化”とかを国是として実行に移していく際、最大の障害になったと思われます。そういう反省のもとにつくられた多摩大の食堂は、“学食”のイメージを大きく変える筈です。“豊かな時代”“感性の時代”の到来の中で在来的な“学食”はも早多くの大学生からも見放されていていますが、多摩大の食堂は都会的ライフスタイルを好む多摩大生に愛されるばかりでなく、多摩大を支えてくれることになる周辺の地域社会の人々からも愛される場所になると信じます。「タイミス（キャフェ）に立寄らずしてタイミス（多摩大）を語ることなかれ！」

惜しまれつつ

各 位

野 田 一 夫

先週は竹下首相の辞意表明というニュースをめぐって、日本中が揺れました。大方の国民の支持を失って久しい竹下氏の退陣は、マスコミの酷な表現——“野たれ死に”“満身創痍”“四面楚歌”……に端的に示されています。氏自身は「後世の歴史家の評価を待つ」という心境でしょうが、それにしても、世論調査の数字は氏自身が辞め時を失ったことをはっきり示しています。

責任ある地位にいる人間の辞め方としては“惜しまれて”という状態が理想であると、小生は信じます。しかし古今東西の歴史をふり返ると、こういう辞め方をした人はきわめて少ないようです。むしろ竹下氏のような例の方が稀ではありません。それほど極端ではなくて、自分は“惜しまれて”と信じながら、思わず地位に長居をした人々の例は、大小無数にあるといえましょ。

そこで最も無難でかつ賢明なのが“任期”とか“定年”で責任ある地位での在任期間をしばるというやり方です。もっとも、任期中または定年までの間に“野たれ死に”すれば致し方ありませんが、それでも任期を短かく、または定年を早くしておいて、絶対にそれらを守れば、辞めていく人が“惜しまれて”去れる確率は格段に高くなる筈です。

こう考えて小生は、理事長に進言申しあげ、多摩大学の学長任期を原則 1 期かつ再々任は絶対に認めず、と規定化して頂きました。ところで専任教授の定年ですが、創立時就任者は 60 歳代なら 70 歳、50 歳代、40 歳代、30 歳代、20 歳代なら、それぞれ 69 歳、68 歳、67 歳、66 歳とし、更に今後は当面一律に 65 歳としつつ、次第にそれを早めていってはどうでしょうか。是非とも「惜しまれつつ勇んで去る」というのを多摩大学教職員の晩年の美学としたいものです。

多摩大学総合研究所の

目指すもの

各 位

中 村 秀 一 郎

多摩大総研は、大学開設と同時に誕生し活動を開始した。その目的は大学の「21世紀を拓く」という理念のもとに、革新に挑戦しようとする行政や産業との効果ある協力関係を開発することにある。

わが国の大学には研究所が付置されているケースは多いが、そのほとんどすべては、国・自治体の予算や大学当局の援助に依存するのを当然のこととしている。

これに対してわが総研は、みずからの研究・運営費用は、みずから稼ぎ出すという基本方針を貫こうとしている。それだけではない。より充実した教育のために、学校法人の収益にも、いささかの貢献を計ろうとしているのである。

総研は民間のシンクタンク、コンサルタント・ビジネスと全く同じ自前主義を原則としている。その理由は社会的ニーズに対応することにおいてはじめて可能となる経済的自立なくして、研究機関としての自立性なしとする判断にもとづいている。もちろんわれわれは、総研の研究・教育方針にご賛同いただける各方面からのご支援を拒むものではないが、それはあくまで自前主義を貫いた結果と考えている。

総研の特徴は、まず大学に結集した、学際性・実索性・国際性ある経済・経営・情報・文化にわたる各分野の一流研究者を擁していることであろう。第二に、時代の要求を先取りする調査研究・教育研修プロジェクトの立案実行能力を持っていることだ。第三に多様化し高度化するニーズに応えるべく、幅広い人的ネットワークにより、学外の一流研究者との協力体制を展開しうることである。

われわれは、既成の大学研究所 シンクタンクとは異質の、開かれた組織であることで、研究・教育・ネットワークの核として機能することによって、独自の存在理由を持つと思う。

たった一回の人生

各 位

野 田 一 夫

TIMISの先号は中村秀一郎氏が始めて執筆されました。早速友人何人かから「病気休筆でもしたの？」と見舞の電話を貰い、恐縮しました。幸い先週も元気で跳び廻っていましたが、すでに一部の方々には予告させて頂きましたように、**TIMIS**は今後中村秀一郎氏と2人で執筆をつづけるつもりです。

さて、多摩大学では小生が念願していた通り、活気に満ちたキャンパスライフが毎日くりひろげられています。ひと月前オリエンテーションの場で全学生に対し、小生はこう呼びかけました。「……第一志望校に合格できなくて多摩大に来た諸君は、是非ともこの1週間のうちにその学校へ行き、設備なり、授業の様子なり、キャンパスの雰囲気をつぶさに観察していらっしゃい。そして、どうしてもまだ未練が残ったら、どうか多摩大学をやめて、来年その大学へ入るための受験勉強に全力を傾けなさい。人生は1回しかないのです。他校に未練を残しつつ多摩大学で学ぶことは不幸です。私を含め、多摩大学の先生方は、誰一人として、落ちぶれてこの大学に来たのではありません。大きな理想をみんなで実現しようと、それぞれに恵まれた地位を捨てて進んでここへ来たのです。……」と。

1週間後、退学者は只の1人もいませんでした。行き交う学生に相手かまわず尋ねてみました。「いやぁ多摩大学が断然いい。設備もさることながら、教授陣にやる気がみなぎっている。……」という元気のいい答えが異口同音に返ってきました。小生にとってこの時ほど嬉しかったことはありません。たった1回の人生、誰もが毎日を納得して生きるべきです。多摩大学の学生も教師も職員も毎日納得して生きているなら、訪ねて来る人は間違いなく、その活気を肌で感じとることでしょう。それが永遠に多摩大学のあるべき姿です。

知之者・好之者不如樂之者

各位

野 田 一 夫

先日、旅先のホテルで、朝何気なくテレビをみていて、たまたま番組に出ていたマッハ文朱さんの話にひどく感激しました。彼女が2年生で高校を中退し、女子プロレスラーとしてスターダムにのし上がったことも、その後わずか2年でプロレス界を退き、タレントとして芸能界入りして活躍していたことも、ご存知の方はたくさんおられることでしょう。

しかし、彼女が理由はともかく昭和59年に渡米し、ニューヨークのハンター大学の聴講生として勉強していたことは、少なくとも小生は知りませんでした。小生がその朝感激したのは、そのことを知ったからではありません。彼女は大学の教室で、米国の教授の講義の余りのおもしろさに魅きつけられ、どうしても正規の学生になりたくなりました。そこで61年に帰国し、ひそかに東海大学附属望星高校の通信教育部の2年に編入学し、3年かかって今年3月同校を見事に卒業、今年は芸能界の仕事を整理して再渡米、今度は学生として新しい人生のスタートを切ることを検討しているとのこと。

昭和34年3月3日生まれ彼女は当年にとって30歳、日本流に考えれば「大学出てから7～8年、今じゃ何を学んだのかも夢のごと……」というところでしょうが、27歳で学問のおもしろさに目覚め、28歳で高校に再入学し、30歳で期待に胸ふくらませて大学の門をくぐる、この非日本的かつ素晴らしく自主的な彼女の生き方に、小生はすっかり感心させられました。

学ぶことが楽しいから勉強する、という彼女のような生き方を現代の日本の大学生すべてに期待することは、果してムリというべきでしょうか。小生はそう思いません。多摩大学の理想的学生像がそのようなものなら、私共教員は日々努力を傾けて、学生達をその理想像に近づける責任があります。

真の産学協同に向って

各 位

野 田 一 夫

去る29日(月)午後、経団連ホールで「90年代を迎え撃つ企業戦略」をテーマとするセミナーが、産業界各社の経営者・管理者の方々を対象として催されました。主催は日刊工業新聞社と多摩大学総合研究所で、内容は以下の通り盛りたくさんでした。

○ごあいさつ 「多摩大学設立者として」 田村 邦彦

「産学協同の新時代」 野田 一夫

○対 談 「情報化社会の光と影」

白根 禮吉(多摩大学教授・電気通信科学財団理事長)

井上 一郎(多摩大学教授・科学技術ジャーナリスト)

○パネルディスカッション「企業文化創造のための戦略づくり」

井上 宗迪(多摩大学教授・丸紅国際経済研究室長)

中西 元男(PAOS代表取締役)

星野 克美(多摩大学教授)

望月 照彦(多摩大学教授)

中村秀一郎(多摩大学教授・多摩大学総合研究所長)

○講 演 「21世紀・変わる世界変わる日本」

日下 公人(多摩大学教授・ソフト化経済センター専務理事)

さて、ひとつの大学の新設を記念して、ちゃんとした新聞社が、都心の大ホールで大々的セミナーを開催したという前例もありませんが、かりにそれを試みたとしても、上記のごとく、その大学の専任教授で全講師陣をうずめ、しかも何百人という経営者・管理者が有料の聴衆として集まることは期待はできなかったに違いありません。多摩大学の誇りはそれが可能なことです。しかも多分3日間でも5日間でも1週間でも、同じ聴衆に対してそれが可能なだけの人材を教授陣に集めていることです。協同とは同等の能力をもち合わせた者同士が共通の目的のもとに手をつなぐことです。多摩大学はそのような産学協同を明確な設立理念として誕生した日本で最初の大学と信じます。

苦情でなく提案を

各 位

野 田 一 夫

先週水曜日（1日）、中村学部長とご一緒に、久方ぶりに全学生と対話を行ないました。開学後そろそろ2カ月、学生たちの間にもいろいろな要求が生じて来たと判断したからです。キャンパスの中でおりおり学生たちと立ち話をすると、「レストランの食事が高い」とか「冷水器が欲しい」……とかいった要望が小生の気になっていました。

何事につけ要求には建設的側面があります。現状満足の中からは進歩が生まれようがないからです。しかし、単なる要求は青年からとかく公正な判断力や責任感を喪失させ、精神と知性を気づかぬうちに幼稚化していくこともまた事実です。“豊かな社会”を基盤とした“大衆化”状況の進展の中では、青年はとかく大衆の名のもとに、責任ある立場にいる大人に対し、まるで頑是無い子供のように限らない要求をつづけがちです。

多摩大学の目的は、どんな職業であれ社会人として責任ある地位に就き、その職責を見事に全うする人材を養成することにあります。したがって私共は、学生たちが学生でいる間に、単なる要求がいかに空しくかつ愚かな行為であるかという認識を、骨の髄までたたき込んでしまう必要があります。心の中に生まれる要求を建設的なものに転ずる能力が“知性”であり、その育成こそ教育が目ざすものです。

そこで、対話集会の冒頭小生は学生たちに「苦情は言うな。提案をしろ」とクギをさしました。「どうしたら質とサービスを落とさないで食事を安くできるのか」、「どんな冷水器の機種がよくてどこへ設置したら一番便利か」……こういう提案をするためには、それなりの勉強と準備の時間が必要です。「苦情は人を愚かにする、愚か者になりたいか？」という問いかけに対し、学生の顔は当惑気味でした。

十字路に立つ大学（その一）

各 位

中 村 秀 一 郎

「大学の教師でいちばん滑稽なことの一つは、性懲りもなく四月の学期始めになると学生のことごとくが本格的な知識的熱意に燃え学問の蘊奥を極めようとして教室に集ってくるという錯覚に陥ることである」

毎年春になると必ず私の心に甦ってくるこの文章は、故林達夫氏の「十字路に立つ大学」（著作集 6 所収）の書き出しの部分である。無数あるといってよい大学論のなかで私にもっとも大きな衝撃を与え続けているのは、戦後初期 1949 年に書かれたこの評論なのである。

教室の実態は、「点取虫」をふくむ勉学の間とするものだけの集りでなく、そこを昼寝の場所とし談話室とし書斎としアトリエとする「高価なる贅沢」をあえてしようとする手合の集りの場なのである。さらに欠席を常習とする相当数の学生を考えるなら、教室はまさに「定義の仕直し」に迫られているのである。

大学がこうなるのは、氏によればアカデミック・マインド、つまり思考型の人間によって制度化され、またそうした型の人間の形成に向くように仕組まれ、この型の人間によって教授陣の大半が占められているという事実にある。ところで学生の方には体系的思考や論理的操作にははなはだ不得手な別な心の型もある。数としては案外多いこの型の心の持主は思考型支配の大学では、この機構の犠牲になってしまうのが、そのほとんどすべての運命なのである。つまり、大学は「制度が人を逆支配し、不具にし圧殺している一つの生きた実例」なのである。

教室を本来の学びの場所とするためには、大学自体が、このような所を得ず、気乗りのしない学生たちにも、己れ的能力と個性を発見し伸ばす手だてを提供する道を、開くことなのである（続く）。

十字路に立つ大学（その二）

各 位

中 村 秀 一 郎

林達夫氏によれば、現代大学革新の課題は、「アカデミックなものに対する闘争」だという。それは前号で指摘したような、大学での思考型支配への抵抗の呼びかけなのである。

人間には誰しも異った能力、たとえばユングのいう四つの能力、思考型（シンキング・タイプ）とならんで、感情型（フィーリング・タイプ）直観型（インテューイショナル・タイプ）煽情型（センセーション・タイプ）が多少の度合いにおいて具わっている。教育者の職能は、型の異なる学生たちの主要能力を発掘しあるいは、発揮させること、その能力の個性的なあらわれ方に適切な方途を見つけてやるといった「至難なわざ」を果すことなのである。

「学校のことを几帳面にやる学生だけが卒業して有能な社会的活動をやっているわけではない。教師的眼鏡からみて始末に負えない学生たちも何とか自分の道を切りひらいて世の中に出てから結構立派な働きをしているではないか。思考型を本位とする大学の建て前では、講義には『糞勉強家』、演習には一握りの好学的秀才を中心に幾つかの層が描かれ、その周辺に行くほど別の心型で伸びそうな青年たちが席の温まらぬ思いで精神的右往左往をしている光景を見るのが常態であるが、この常態は実は教育の大義からいえば変態なのだ」。

これを正すのは、たしかに容易なことではない。幸いなことに、多彩な職業的キャリアを持ち、幅広い社会活動をおこなうことで、「アカデミック・マインド」を相対視しうる人々から成立つ多摩大教授陣は、卓越した知性であった林氏が、すでに49年に「時代遅れ」と指摘し、今日に至っても全く解決されていない「変態」を正す意欲と能力を期待されてよいのである。

学部ないし学科新設構想

各 位

野 田 一 夫

多摩大学の今後の発展にとって、最も重要な経営戦略的課題は学部ないし学科の増設です。去る10日から2週間ほど、小生は海外の「先進オフィス視察団」の団長として約30名の日本の産業人の方々と欧米5都市を廻ってきましたが、旅行中片時も胸中を去来して止まなかったものは、この課題でした。

学部ないし学科の増設は、単に収容定員数を倍増することによって、大学の基礎的財政状態を著しく改善してくれるのみでなく、教授陣の拡充によって、大学および総合研究所の对外活動の強化に役立ちます。問題は増設の対象は何かということです。小生の考えでは、このための基準は、①設置分野の学問の研究と応用が時代から強く要求されていること、②少くともわが国の大学では設置の前例がないこと、それでいて、③設置認可上さして困難でないだけの教員を揃えられること、の3つです。

そこで具体的にご提案申しあげたいのは、①オフィス・フェシリティマネジメント、②レストラン・ホテル、および③都市計画・開発、の3つです。いずれもこの分野は欧米、とくに米国ではすでにいくつかの大学で学部ないし学科を設けてそれぞれ定評のある研究を行い、また毎年専攻学生を産業界に送り出して高い信用を得ております。しかしわが国では③に関して東京大学の都市工学科と東洋大学の不動産学科、②に関して立教大学の観光学科を数えるのみですが、何れも内容は小生の構想するものからはかなり外れています。①に至っては、時代の強い要求に対してわが国では大学側に対応の気配すらありません。①②③に関しては何れ詳しい構想を示させていただきますが、これら以外に各位でご提案があれば、ご示唆だけでも頂戴できないものでしょうか。

Some 17 years olds go to Paris to……

各 位

野 田 一 夫

先日の海外出張の折、ちょうどシカゴからミュンヘンへ向うアメリカン航空の中で、隣席の友人から手渡された英字紙の全面広告に、思わず心を奪われました。この広告の上部には左右に相對して、2人の若きテニスプレーヤーズの颯爽たる試合中の姿写真が掲載されており、写真の下には大きな活字で

Some 17 years olds go to Paris to study history,
but others go to make it.

というキャッチフレーズがさりげなく2行並べられていました。

これらの若きテニスプレーヤーズはいうまでもなく、去る6月に開催された全仏オープンテニスで優勝したマイケル・チャンとアランチャ・サンチェスでした。天下のステファン・エドバークとステフィ・グラフをそれぞれ決勝で負かした2人はともに17歳、どちらも今年までは一般には無名の選手であったが故に、全世界のテニスファンを熱狂させ「歴史は若者によってぬりかえられた」という冷厳な事実を心に刻みつけてくれました。

勝負のはっきりするスポーツの世界では、実力をもった新人の登場によって常に新しい歴史がごく自然に形成されていきます。しかし他の世界ではそうはいかないもどかしさを、今われわれは内外の政治情勢によって思い知らされています。大学の世界でも、過去の歴史の中で權威を確立した大学の存在が、新しい歴史の展開にとって最大の癌となっているようです。この意味でも「21世紀を拓く」という理念のもとに発足した新生の多摩大学には世間の多くの人々の期待が集っています。近い将来、多摩大学も必ずや日本の大学の歴史をぬりかえるにちがひありません。

Some universities enter the world of academics
merely as newcomers, but others enter as innovators.

深夜の遡航

各位

野田 一 夫

先日、同年の友人堤清二氏から、新刊『深夜の遡航』（新潮社刊）が贈られてきました。同氏が経営者としての超多忙な時間の合い間に、辻井喬というペンネームで、小説、詩、評論と精力的な執筆活動をつづけていることは、広く知られています。同時に、氏の思索の深さと時に神経質と感じられる程の言語表現へのこだわりからか、書かれたもの、とくに詩と評論が読者にとって難解であることにも定評があります。

今回の作品も評論集ですから、寝ころんで読める類のものではありません。しかし、折しもスポーツも儘ならず、外出もおっくうになりがちな梅雨時、この週末に小生は書斎の机に向ってじっくり『深夜の遡航』に読みふけりました。

この本の中で氏は、東京大学でかつて時間講師をした時の体験をこう書いています。「……初めての講義の日、（教室が静かすぎるので）ふと気づくと学生達が一所懸命にノートを取っているのだ。自分の学生時代の経験では想像もできない光景だった。……学期末試験になって、……自分の頭で理解していないと書けない問題を出してみても、現在の学生の学力の質について、またあらためて認識させられた。彼らは暗記する能力においては抜群であるにもかかわらず、自分流に考えてみる姿勢を持っている者が、きわめて少ないのであった。……」

氏はこの現象を“画一化という名の暴力の支配”という激烈な言葉で表現し、大量生産を基盤とする市場の大衆化にその原因を求めています。果してそれほど迂遠なものにあるのでしょうか。小生には、大学の理念喪失、設備の荒廃、教師の無能無気力……といった原因の方がずっと納得できます。多摩大学は識者のこうした“運命論”に挑戦し、自らの知恵と努力で個性的かつ活力に満ちた青年をどしどし世の中に送り出しましょう。

知識と表現力

各位

野 田 一 夫

知識と表現力（または意思伝達力）とはいわば車の両輪の関係にあります。知識はそれ自身で人生を豊かにしてくれますが、知識の水準にふさわしい表現力がなければ、その知識も、社会的にはほとんど無に等しいといえましょう。したがって、知識の習得が教育にとって重要な目的であるなら、教育は初等から高等に至るにつれて、高度な知識にふさわしい高度な表現力の錬磨を重視せざるをえない筈です。

さて、欧米では人が高等教育を受けたかどうかは、その人に接した時、話の内容と話し方で判然とわかります。しかしわが国のみは、例外です。なぜかといえば、わが国の教育では伝統的に、小・中学校から高校、大学と教育が高度化するにつれて、教える知識は高度化するのに、逆に表現力の錬磨は正規の教科目では次第に軽んじられることになっているからです。

多摩大学ではこの伝統に反し、一般教育で「国語Ⅰ，Ⅱ」と銘打って、正しい現代日本語の書き方と話し方を必須科目とするほか、選択科目として、音楽、絵画、または演技による表現法を設置しておりますが、将来産業界で活躍する人材の養成にとって、この程度では極めて不十分だと小生は考えております。

米国の産業界の士官学校といえる経営学大学院では、程度の差こそあれ、すぐれた表現力の錬磨を学生に求めます。たとえばハーバード・ビジネス・スクールでは「マネジメント・コミュニケーション」と称して表現力の技術および実際の習得を「財務管理」や「マーケティング」等と並べて最も重要な講座にしています。多摩大の卒業生が何よりも表現力において断然他校の卒業生よりも秀でるようになるために、私ども教員一同も努力を傾けますが、各位もどんどん具体的提案なりご示唆を賜れば幸甚です。

開学式典後の 2 大工事

各 位

野 田 一 夫

去る 7 月 21 日午後、多摩大学の「開学記念式典」とともに、記念シンポジウム、キャンパスクルージング、祝賀パーティ等の多彩な行事が催され、何と 1,000 人になんなんとする多数の来会者でキャンパスは夕刻まで賑わいました。この一連の催しをもって多摩大学は名実ともに発足したともいえますが、実際にはキャンパス内の工事には、まだ未完成のものが残されています。大きいものは 2 つです。

第 1 は庭園（グランド）工事です。この用地の下には多摩市民のための上水道施設がつくられており、その施設工事の際の業者の跡始末の悪さから、私どもが校舎建設過程で迷惑をこうむったイワクツキの場所です。いざ建物ができ上ってみると、前面の広大な庭園は排水の悪さから常時田圃のごとき状態を呈し、予定より 1 メートルほど高く盛り土までしてしましたが、芝はもちろん灌木類を植えることもできません。そこでこの夏休み中に排水工事をやり直し、秋には建物をひきたてるような庭園を完成させたいと念願しています。

第 2 は、校舎の裏手、すなわち尾根街道側のエントランスおよび駐車場の工事です。本来ここは 4 月の開校時には完成している筈でしたが、工事全体の遅れとか予算超過の関係から 2 期工事に廻されたものですが、いざ校舎が完成してしまうと、駐車場（約 30 台分）を支える人工地盤建設工事等がやりにくくなり、そのため工事費がかかりすぎるということで、目下理事長のゴーサインが保留されています。予算はともかく、尾根街道口が完成しないことには、折角評判の多摩大学の校舎も機能不全といえますから、理事長のご決断によって、何としても今年中には工事を完了させたいものです。

どうか 2 大工事の完成後、期待して多摩大学をお訪ね下さい。

ネットワーク型研究組織

各位

中 村 秀 一 郎

多摩大総研は、幅広い人的ネットワーク形成のために、学外
の一流研究者との協力体制を固めるとともに、ユニークな実績
を持つシンクタンクとの提携を進め、すでに7つの組織の代表
者からご賛同をいただいております。

その7組織とは、わが国唯一の文化領域の基礎研究を目標と
する㈱ぴあ総合研究所（代表取締役所長 松井隼）、セミナー
フォーラムの企画・制作・運営などを担う科学プロダクション
㈱コスモピア（社長宮田みどり）、マーケティング戦略を、ト
レンドスポッターという自己規定に基づき、大胆な仮説提起に
より提案する㈱ブレイン・フォーラム（社長砂川肇）、調査から
制作までの一貫体制で、コーポレート・コミュニケーション
の革新を目指す㈱バス・コーポレーション（社長小熊俊行）、
流通・サービス業研究では日本を代表する研究機関の一つであ
る流通産業研究所（理事長高丘季昭・所長小山周三）、「主婦
産業を創造する」という理念のもとに企業社会と生活者社会と
の接点たる使命観を持つ㈱ドウハウス（社長小野貴邦）、女性
の立場・感覚による企業への商品開発の提案、2万人を超える
女性のオピニオンリーダーと企業と行政を結ぶ㈱ライフカルチ
ュアセンター（社長澤登信子）です（順不同敬称略）。

このような多彩かつ個性ある組織とのネットワーク形成の原
則は、それぞれの自立性を前提として、研究上のリーダーシッ
プを問題ないし役割によって交代することであり、その連帯を
裏付けるものは、新しい産業社会とそれに対応する企業・組織
イメージを共存するところにあるわけであります。このネット
ワークの内容は、多摩大総研が発展していく過程で、時代環境
に応じて大きく変わっていくでありますが、形成の原則その
ものは末長く変化することはないと信じます。

バッハをショパンのように……

各 位

野 田 一 夫

最近読んだ本の中では、中村絃子さんの『チャイコフスキー・コンクール』に最も感銘をおぼえました。クラシック音楽界の人間模様やエピソードの面白さとともに、それらにことかけた彼女の所感や所説のユニークさと暢達きわまりない文章の魅力に脱帽しました。とくに記憶に残るのは、次の指摘です。

- ・名だたる難曲を機械のように正確に弾きこなす若い日本人ピアニストは少なからず育っていても、伝統的な“丸暗記主義型”教育の故に、悲しいかな「ステージマナーを含んでの人間の魅力、技術をのりこえて語りかけてくるサムシング」の芽はつまれてしまい、世界の檜舞台に立てる者は少ない。
- ・日本は今や時に月間何百回も外来演奏家を招きうる巨大な音楽マーケットとなったが、鑑賞者の多くはリゴラスな“教養主義”の呪縛から今もって解放されていないために、日本は積極的な意味でのクラシック音楽愛好国とはいえない。
- ・日本の演奏家・鑑賞者が絶対視してきたクラシック音楽界の伝統的権威も西欧社会で揺らぎ始めている。権威者の間でこれまで暗黙の大前提であった“音楽的”ということをも「“出鱈目”に演奏することの対極概念」と考えると、今日の世界のピアノ界は“良い”教師と教育法の欠乏によって混乱状態を呈し始めており、「なぜバッハをショパンのように弾いていけないのか？」という若い有能なピアニストの問に対し、その道の権威者すら明快な回答ができない。

音楽だけでなく大学の教科目の大部分では、明治以来“西欧的権威”が支配的であり、それを丸暗記した者が優等生、それを何とか身につけた者が“教養人”と呼ばれてきました。その意味で中村さんの本は、21世紀の日本の大学教育のあり方にもいろいろ貴重な示唆を与えてくれます。ご一読をお薦め致します。

憂うべき求人競争

各 位

野 田 一 夫

8月20日は来年度の大学卒業予定者にとって「会社訪問解禁日」です。とはいっても例年のごとく、この解禁は実質的には何の意味もありません。とくに今年は、長期の好況が雇用事情に反映して、大学生は未曾有の売手市場。そのため産業界各社は、就職協定など無視して、春先からあの手この手の戦術を展開、求人戦はすでに概ね峠を越してしまっています。

各社の人事部にとって目下の悩みは、採用の内内定を出した学生が果して本当に入社に応じてくれるかどうかだけで、会社によっては、自社に内内定した学生が他社へのワキ見をしないように、夏休み中に全額自社負担で旅行を実施（社内用語で“拘束旅行”）したりしています。それも一流校はハワイ、二流校は軽井沢、三流校は東京ディズニーランドと差をつけたりするそうです。

何という情けない産業界の実情でしょうか。企業が自分達できめた就職協定を平気で無視したことで、学生達は社会人になる前に、産業界の倫理感の水準を見抜いてしまいます。“拘束旅行”とか“手切れ金”（内内定を断る際に支払われる金）への出費で、いかに経費の使途にうしろ暗いウラがあるかを敏感に嗅ぎとります。青年から正義感と潔癖性を失わせることは最大の反社会的行為だと、産業人は考えないのでしょうか。

昔から「求人難の年に人材乏し」と言われるゆえんは、会社が学生達の倫理感や心構えを完全にスポイルしてしまうからです。外国に比べて日本の大学生活は一般にレジャーへの指向性が異常に目立ち、遊び心を抑えて勉学に励む学生は変人扱いされる程です。大学生としての知識・見識もなくマナーズもたしなみも身につけていない若者を見境もなく大量に採用しつづける企業には、決して明るい未来はないと思うのですが……。

私語をどうする（その一）

各 位

中 村 秀 一 郎

大学の教室での私語の多さが、ようやく社会的にも問題とされ始めているようです。だが私語をなくすといっても、これにはキメ手がありません。とくに大教室での学生同志のおしゃべりを取締る方法がないからです。

私は学生のマナーよりも先に、まず教師の態度を問題とすべきだと思います。だれも興味を感じない、分りにくく、無味乾燥で情熱なき講義を、おとなしく聞けという方に無理があるからです。

先日伊丹敬之氏の好著『人本主義企業』をめぐる座談会（2020 誌近刊）で、正村公宏氏が、学生たちに「わけのわからぬことが書いてあるのを学問と思うな、学問は決して面倒くさいものではない。頭の悪いやつが書いているからそうなるのだ」と教えていると語られていましたが、全く同感です。

「ただし」と氏は付け加えています。「世の中は実際問題として非常に難しい。人間というのは非常に難しく、それを反映した難しさは本物だ」と。

伊丹氏の著書はこの難しさを、明確なコンセプトと鋭い表現で説明することで、21世紀に向けての日本企業の進路を明快に説明していますが、教師がこの意味での「本物」の講義に徹すれば、私語は減るに違いないと思います。

そうなれば、教室の雰囲気壊す学生は少数となり、これら教師の学生に対する対応も容易となるに違いないと思われます。

多摩大では、聞くに耐えないような講義はないと信じてますが、だからといって学生の私語が絶無というわけでもないようです。

私語対策は、まず教師が自分の講義内容を再点検することから始めたいと思いますが、いかがでしょう。

私語をどうする（その二）

各 位

中 村 秀 一 郎

前号で私語対策として、まず講義内容の再点検を提案しましたが、それと同時に講義の仕方を問題としたいと思います。それには、まず教室のインフラストラクチュア整備とでもいうべき前提があります。

私は専修大学で長年マンモス講義（受講生ほぼ1,000人）を担当してきましたが、15年位前、突然答案用紙を配布して、「君たちは講義中、なにをお互いに話しているのか正直に書きなさい」という試みをやったことがあります。答えはなかなか傑作でした。なかでも最も多かったのは、今夜のマージャンのメンツを集める、夏休み旅行プランづくりの2つであったと記憶しています。こうなるのは大教室は友人が集りやすく、とくに雨天の日には教室以外に学生たちが会話の出来る居場所がないからだということを知りました。私は、この時から、私語する学生たちにある種の同情を感じるようになったのです。教室に出たくない学生たちのために、雨天でも十分居場所があるようにしたいというのが、このときからの私の夢となったのです。幸い大きなアリーナ等を持つ多摩大では、これが実現しています。

講義で静かな雰囲気を保つには、教師の姿勢が決定的です。私は学生たちに毎年、1時は1時5分ではないと申渡し、正確に1時に授業を始めてきました。そのためには、ほぼ15分前に教室に入ります。と同時に講義中黑板に書くことは、この時間内に学生たちに手伝ってもらって全部完了しています。遅れて来る学生もほとんどなくなり、600人前後の講義をきわめて平静におこなうことができるようになりました。正確に時間を守らない教師の態度が、私語を誘発する環境をつくり出していると思いますが、いかがでしょう。

TIME IS MORE THAN MONEY

各 位

野 田 一 夫

「タイム イズ マネー」という諺は、有名なベンジャミン・フランクリンが彼の自伝の中ではじめて使った言葉で、少年期にあった米国資本主義を象徴する逞しくかつ素朴な事業家魂を、この言葉以上に簡潔に表現することはできません。近代資本主義成立の鍵を学問的に徹底して解明しつくそうとしたかのマックス・ウェーバーでさえも、その労作（大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫）の中で、この自伝を最重要な文献として、何度も引用しています。

たしかに、フランクリンが自伝を書いた18世紀末、いや、20世紀もついさき頃まで、いわゆる“工業化社会”のもとで、大部分の勤労者の仕事の成果は、基本的に時間の関数でした。つまり、人はふつう筋肉・技能型労働に従事していたからです。しかし21世紀に向って、時代ははっきりと“情報化”社会の様相を呈しはじめています。

情報化社会の決定的特徴のひとつは、働らく人の多くが頭脳・知識型労働に従事するようになることです。この労働は筋肉・技能型と対照的に、成果が時間の関数でもなければ、定められた職場でしかあがらないものでもなくなったことです。勤労者なら、出勤日に職場に出て一定時間拘束されて何かをやったからといって、必らずしも勤め先に対して何かを寄与したことにならないわけです。

こうして「タイム イズ マネー」はも早意味をなさなくなりつつあります。しかし、依然として貸借も売買もそして貯蓄もきかぬ“時”という資源は、万人に1日24時間均等に配分されています。だからこそ、頭脳・知識型労働に従事する人にとっての新しい諺は、実はTIME IS MORE THAN MONEY なのです。

TIMIS 会員 600 名

各 位

野 田 一 夫

皆様のご協力にて TIMIS 会員も着実に増加をつづけ、すでに 600 名に達しようとしています。既設大学における“同窓会”とか、小・中・高等学校における“父母会”のような組織のない多摩大学としては、TIMIS 会が本学の活動に対し日常的関心と理解を頂いている方々の唯一の組織です。

会員の増加につれて、毎号のご返信の数も増加し、ご感想、ご激励、またご提言等には常に感謝し、感銘致しております。それぞれのご返信に対しご挨拶を致すべく、つとめて電話なぞ差上げるように致しておりますが、それも完全には行届かずつい失礼のままにうちすぎることのありますこと、この場を借りてお詫び申し上げます。

多摩大学も開学後早くも半年、建物・設備等には幸い大きな支障はなく、また講義は「年間講義案」に沿って実に整然と行われておりますが、ただグラウンド（庭園）だけは予想外の排水不良のため一時は水田の状態を呈し、芝仕上げはもちろん灌木類の植樹もままならぬままにて、関係者一同散々頭をかかえさせられました。

しかし、夏期休暇も正に終らんとする 9 月上旬になって、東京都および住宅都市整備公団の正式了承が得られるとともに、当学園本部と施工者（熊谷組）との工事費に関する合意も成立して、排水工事はこの程やっと着工されました。今月末の工事完了とともに、芝の種播きが行われ、冬口までには何とか多摩大学もようやく体面を整えることができると信じます。

グラウンド工事の完了をまって公約通り大学を広く市民の方々に開放し、目下計画中のいろいろな催しを逐次実施に移して参りたいと考えております。TIMIS 会員の方々には真先にご連絡させて頂きしますので、期待をもってお待ち下さい。

シンガポールの教訓

各 位

野 田 一 夫

今週月曜日（18日）の夜東京プリンスホテルで開催された「三宅和助事務所開設披露パーティ」は、各界からの出席者約500名で大変な賑わいでした。欠席者から寄せられた多数のメッセージの中から唯一会場で披露されたのはリー・クアン・ユー氏（シンガポール共和国首相）のもので、三宅氏が大使時代に深めたリー氏との友情を改めて私達に印象づけてくれました。

ご承知のごとくシンガポールは、過去20年間世界で最も劇的な経済的成功を収めた国で、その1人当たりGNPはアジアで今や日本に次ぐ不動の地位を占めている上に、市民生活における秩序・安全・清潔という点と、“ガーデン・シティ”というキャッチ・フレーズにふさわしい緑したたる美しい都市景観とによって、世界の観光客を集めています。

そのシンガポールは国土面積わずか618km²弱（ほぼ淡路島程度）、その人口260万人強（淡路島はわずか16万人）、しかも1965年にマレーシア連邦から独立して間もない新生国家にすぎません。私自身の体験でも、1970年頃のシンガポールというのは、未来の繁栄を想像させてくれそうな何物もないれっきとした弱小後進国の1つでした。

今日のシンガポールは、経済的にも政治的にも世界の強国の1つです。小国シンガポールを強国シンガポールへと短期間に変貌させた最大の原因が建国以来の首相リー氏の見識と指導力であったことは、内外の識者の等しく認めるところです。大国が強国となる場合と違い、小国が強国になるにはそれなりのリーダーシップと戦略的思考を必要とします。リー氏のような天才の出現は望むべくもありませんが、小さい大学である多摩大学の教職員は衆知を集め、国内的にはもとより国際的にも影響力のある大学をつくりあげようではありませんか。

パールマンを聴きながら

各 位

野 出 一 夫

イツァーク・パールマンが2年ぶりに来日中です。ヴァイオリニストとして彼が語られる時、演奏中の表情やちょっとしたしぐさも加わって、彼の音楽が会場内にかもし出すいいような明るいさとともに、必らず「幼い頃小児麻痺を患った不自由な身体」が強調されます。先週その彼の演奏をサントリー・ホールの一隅で聴きながら、ふと思い出したことがあります。

もう20年も昔のこと、私が講義中の教室に遅れて入って来た学生歩き方が気にくわなかったもので、例の大声で注意しました。「青年らしいちゃんとした歩き方をしろ!」「すみません。ちょっと足がわるいもんですから……」「なに足が? 頭でなくてよかったなあ……」といったやりとりがあったようです。

というのは、そんなやりとりなどすっかり忘れてしまっていた翌々年の卒業式の朝、研究室にいた私のところへ、日頃見かけぬ学生が不自由な足をひきずって訪ねて来ました。そして卒業の礼を述べて言ったのです。「先生おぼえておられますか? いつか教室で先生にどなられたAです。ものごころついて以来人前で大声で足のことを言われたのはあの時が始めてでした。しかし、先生の一言は私にとってこの上もない激励でした。あれ以来私は、頭のわるい不幸な人達が大勢いるんだと考え、一生懸命勉強することにしました。幸い良い就職先もきました。先生のおかげです。ありがとうございました」と。

「そうか、よかったなあ、頑張れよ」と顔で笑いながら、私の心は動転していました。あの日あの教室であの学生をどなった時、私はてっきり彼がスポーツか何かで足を捻挫したぐらいにしか思っていなかったのです。受取り方次第では、私の一言は相手の心にとり返しのつかない傷を与えたかも知れません。パールマンの奏でる伸びやかなブラームスのメロディーに浸りながら、私はこの思い出に思わず冷や汗を覚えた次第です。

“高齡化”と教育

名 位

野 田 一 夫

消費税とのからみで“高齡化”が論じられないことはありませんが、どうしたことが、教育とのからみで“高齡化”が論じられたことはありません。わが国では、小・中・高等学校に比し大学教員の高齡化は深刻で、一部を除いて着々進行し、多くの大学では“臨界点”に達しています。“臨界点”という表現が適当かどうかわかりませんが、小生は教員の平均年齢60歳が健全な大学教育を実施できる限界と考えています。誤解のないよう強調させていただきますが、小生は60歳が個人として大学生の教育を健全に行なえる限界だと主張しているわけではありません。老化の個人差はひどく大きく、70歳以上でも十分教壇で名講義をする先輩を小生は数多く知っています。

しかし、そういう方々ですら、どこかで教育者としての限界が必ず来るからこそ、どの大学でも、一律に教授の定年を定めているわけです。ましてや、大学教授も教師である以上、毎週の講義やセミナーだけでなく、時あるごとに学生に接して肉体的には苦勞を共にし合い、精神的には歎びとか感激を分か合う必要もあるとなると、年齢的要素は無視できないのです。

多摩大学は当面教員の定年を70歳としておりますが、平均年齢は現在のところほぼ50歳で、小生の理想（45歳）をかなり上廻っています。現在の多摩大学の教員構成は質的に文句はありませんから、このまま当分推移していくことを期待しますが、他方本学教員の平均年齢は知らぬ間に毎年“臨界点”に近づいていくことも、決して忘れてはなりません。当面の解決策は2つです。第1は、大学院を設置し、比較的高齡の教員でその教育を担当すること。第2は、新学部ないし学科を設置し、比較的若い教員を迎え入れること。この2つはどちらも、多摩大学にとって早期に実現すべき最重要プロジェクトと信じます。

学長の仕事

各位

野田 一 夫

「学長になられてお忙しいでしょう。毎日大学へ行かれるのですか?」「週2回ぐらいでしょうか」「えっ、週2日ですか?」「いや、週2回です。学長室に30分ぐらい居て、すぐ帰ってしまうこともありますから……」「じゃ、それほどお忙しくはないんですね……」「いや結構忙しいですよ」「……」,こんな会話を4月以来何十回くりかえしたでしょうか。

学長の仕事はもちろん大学によって異なる筈です。同じ私立大学でも多摩大学の経営上の特徴は①規模が小さく(収容定員160名),構成が単純(1学部1学科のみ)なこと,②経営体として独立していないこと,③教・職員とも有能でヤル気のある人材が揃っており,しかも教員間および教・職員間の人間関係が極めてよい(日本の大学ではひどく珍らしい)こと,の3つで,これらを前提として小生は,学長の仕事を次のように割り切っています。

学長として学内および学園関係の公式・非公式行事・催事で求められる役割を果たしたり,マスコミとか地域社会に対して望ましい対応に努めることは当然ですが,それら以外では,少くとも3つの重要な仕事のみを己に課しています。すなわち,①本学の存在と特色と理想を可能なかぎり多くの人々に認識してもらうこと,②本学の将来構想実現のための布石を各方面に重点的に打っておくこと,③本学の中・長期計画(施設・設備の拡充,大学院の設置,新学部ないし学科の増設,外国の大学・研究機関との提携……)を継続的に推進していくことです。

従って,ほぼ毎日都心に居て,いろいろな人と直接会ったり,会議・会合に出たり,電話を通したりして会話しつつ,たのんだり,意見を出したり求めたり,説得したり……することのやたらに多いのが,本学学長の当面の仕事といえましょうか。

高齡しか遺しえぬもの

各 位

野 田 一 夫

先々回の「高齡化と教育」に対しては読者の方々の反応が意外に大きく、教育の年齢的限界に関しては、今少しく小生の意見を補足させて頂く必要を感じました。

人によって違いはありますが、小生は若い頃から年老いることに対しては、不安よりは期待に近い気持を抱きつづけて今日に至りました。それは幸い常に周辺に「年をとったらああいうふうに生きたい」という敬意を感じさせる人生の先輩が何人もおられたからです。そういった方々は、決して地位とか権力とか富といったものを保持していたからでなく、職業は異なれ現役中ひとつの信念をもって生きて来た人のみが身につけた人生智、風格、処世感、生きざま……といった人間的属性によって、後輩である小生の心を魅きつけたのです。

有名な文学作品から例をとれば、すぐ心に浮ぶのは、ヘミングウェイの『老人と海』の主人公サンチャゴです。外面からみれば何もかも老けこんでいるのに眼だけは不屈な輝きをみなぎらせているサンチャゴは、少年マノーリンにとっては“世界の漁師”です。終日一匹の魚すらとれない日々が何十日とつづいてもグチひとつこぼさず、翌日はまた準備万端を整えて海へ漕ぎ出していく老人の姿に、少年は感激します。

不漁の84日の次の日、久しぶりに鉤にかかった超大カジマグロを舟にくくりつけるまで、老人はたった独りで2日2晩、傷だらけになって闘います。こうしてやっと我が物とした獲物は、帰路それを狙うアオザメの群に何回となく襲われ、老人は疲労困憊した身体を鞭打ち、勇猛心を奮い起こして再び闘いますが、港に着くまでに獲物はくいちぎられて遂に頭と背骨と尻尾だけになります。闘い疲れて家に帰りつき、昏昏と眠りつづける老人の姿に、少年は涙を流しつづけます。老人は何と素晴らしいものを少年の心に遺したことでしょうか……。

Rapport通算100号

— 会員名簿作成へのご協力をお願い —

各 位

野 田 一 夫

現在毎週金曜日各位にお送りさせて頂いておりますTIMISは、ご承知のごとく、多摩大学設立までの1年4カ月間関係者の方々に毎週火曜日にお送りしつづけたハガキ通信 Rapport（『多摩大学設立の歩み』と題した小冊子として集成済み）をひき継いだものです。Rapportは結局71号で終結しましたから、今回TIMIS 29号は、Rapport通算で丁度100号という、キリのよい回を重ねたことになります。

しかし、同じウィークリーのハガキ通信ですが、Rapportは多摩大学の設立責任者であった小生が関係者の方々に対して状況報告、構想や理念、提案や所感を書きつづけたものであったのに対して、TIMISは新設なった多摩大学の教学責任者である小生と中村秀一郎氏が、関係者をふくめ広く多摩大学に関心を寄せて下さる方々に対して、多かれ少なかれ教育にからんだテーマの essay を連続執筆しているものとご理解下さい。

Rapportが最終段階までに250名弱の読者に達したのに対して、TIMISは有料会員制をとらせて頂いたのに、すでに600名を超す方々が毎週読んで下さっていることは、執筆者であるわれわれにとって非常な喜びであるとともに、一入重い責任を感じずにおれません。同窓会も父母会もない多摩大学にとって、私共は、TIMIS会員のみが唯一最大の応援団と心得ております。

したがって、今後多摩大学で行う行事・催事や、多摩大学関連の主だったニュースはまずTIMIS会員にお知らせ致したいと思いますし、また、できますれば会員相互間の交流の輪も拡げて参りたいと念願致します。つきましては名簿作成のため、この往復ハガキの返信用に必要事項ご記入の上ご投函下さいますよう、是非ともお願い申し上げる次第です。

遊 於 藝

各 位

野 田 一 夫

還暦を過ぎたら残された人生を1日1日よく噛みしめて味わい、親しい友人・知人とのつき合いも、映画・演劇・音楽の観（鑑）賞も、読書も旅もせかさず心ゆくまで楽しみたいというのが、若い頃からの小生の念願でした。62歳の現在、心ならずもこの念願は十分果されたとはいえませんが、それでも以前に比べれば、幸い格段に納得のいく毎日を過ごしています。

30歳前後から関心の拡がりとともに多方面にわたる仕事を一手に引き受け、馬車馬のように働らいてきたためか、オフィスのある都心から遠いところへ仕事で行くのが嫌いで、たまに出張しても“トンボ帰り”が普通でしたが、この頃は時間の許す限り地方での講演や会合も引き受け、しかも仕事のあとはその地その地のよき方々と一々旨酒をくみ交し、珍味を賞でながら歓談に時を忘れ、明けては開発地の状況を視察したり名所旧蹟を訪ねたりしてから、ゆっくり帰京しています。

先日は水戸での会議のあと、かねてから一度訪ねたいと思っていた弘道館を見学しました。江戸時代後期に全国に続々つくられた藩校の中で規模・内容とも随一と称せられただけに、現存する正門、正庁等の建物の風格が何よりもまず人々を魅きつけます。当時は敷地が54,000坪（多摩大の敷地の5倍以上）あったと言われますが、建物に使われた素材の立派さ、高い天井、広い廊下、庭園の優美なたたずまい……に感銘を受けました。オ、イニ、しかしもっとも感銘を受けたのは、弘道館の教育の理念「アップ遊於藝」でした。これは設立者徳川斉昭（烈公）が論語の中から選んだもので、「悠々楽しみつつ学ぶ」という意味だそうです。広大な敷地内に堂々たる建物群を配し、全国から賢人を師として迎え、前途有為の青年におおらかな教育を施した先人には、ただただ頭が下がりました。史上空前の“豊かさ”を誇る現在の日本の指導者にはどんな教育理念があるのでしょうか。

読書の秋

各位

野田 一 夫

最近、吉本ばなの随筆集を読んでいて、ひどく自分自身を反省させられました。これまで彼女の小説をいくつか読んで、私は彼女のことを、才気にあふれるハネアガリの新人類作家だと勝手に想像していたのです。いや彼女への偏見はその作品に接する前に私の心の中につくられていたに違いありません。吉本隆明の娘であることとか、“ばなな”というふざけた名前にふさわしい人をくったメガネの愛用とか、文壇への派手な登場の仕方……によってです。

ある随筆の中で彼女は、『TUGUMI』執筆中の苦勞を卒直に語っています。雑誌への連載分の構想を練りに練り、丹念にメモノートをつくり、原稿を何回も書き改め、しかも締切りに追われる……苦勞についてです。私はこの作品を“コワイモノ知らず”の彼女が才能にまかせていわばナグリ書きしたものと信じていました。もちろん、執筆の苦勞を知って読み直したところで、私と彼女との感覚や嗜好の相違が解消してしまうわけではありませんが、しかし「山本周五郎賞」の審査委員である年長の作家たちが、多分そうした相違を感じつつもこの作品を高く評価したことに、私は改めて安心と敬意を感じました。

別の随筆の中で彼女が「私が父に言葉でなく最も強く教えられたことは文学でも思想でもなく、例えば『大勢で飲む時はその場の最低の人間（注、最もへりくだった態度を守れる人間の意）になれ』、ということだ」と書いているのを読んで、私は彼女の父親、つまり吉本隆明という思想家にまで偏見を、しかも若い頃以来実に長いこと抱きつづけてきたのではないかと、いう反省に駆られざるをえませんでした。「人間にとって偏見は不可避」であればこそ、「教育者にとって偏見は禁物である」という金言がしみじみ心に感じられる“読書の秋”です。

横山寛彰君の死を悼む

各 位

野 田 一 夫

13日夕刻オーストラリアから帰国し、成田から東京へ向う車の中へかかってきた電話でいきなり伝えられたのは、何と「学生横山寛彰君死す」の悲しい報せでした。先週木曜オートバイで帰宅の途中転倒、頭部を強打して病院にかつぎこまれ、4日後のその日の朝、遂に帰らぬ人となったとのこと……。しばし絶句しつつ、いいようのない無念さにひたりました。

私共教職員の理想を托した多摩大学第一期生、そのわずか210名のうちのかけがえのない1人、しかも誰よりも学園生活に馴染み、あらゆる催しに積極的に参加し、天賦の明朗闊達さでクラスメートの誰からも愛されたという彼を突然失ってしまうとは……。彼の自宅のあるという「佐倉」のインターチェンジを車が通り過ぎると、何かの因縁か曇り空からしとしとと雨が降りはじめ、暗い私の心をより一層暗くしました。

翌日、この冬一番の木枯しが吹いた日の午後、ご自宅に近い妙傳寺で行われた告別式に井上一郎教授と一緒に参列しました。ご両親にお悔みと励ましの言葉でもと考えていたのですが、お焼香後はお顔すら見るにしのびず、逃げるように帰ってきました。25年前幼ない長女を亡くした時の辛かった思い出が胸に蘇り、出会ったたくさんの多摩大の学生諸君に対しても、いつものように声をかける心の余裕すらなかったのです。

娘の死をいつまでも悔みつづけた妻を叱りながら、実は私も心では娘の死をいつまでも悔みつづけたものでした。「散る桜、残る桜も散る桜」という歌の意味を頭では十二分に納得しながら、心ではなお、開こうとする花びらが色あせた花びらより先に散る不条理にこだわるのが、人間というものでしょうか。

謹んで寛彰君のご冥福をお祈りするとともに、時の流れが、ご両親の悲しみを少しずつ癒してくれることを信じるのみです。

現代の若者たち

各 位

野 田 一 夫

先週土曜日、横山寛彰君のご両親が揃ってわざわざ多摩大学にご挨拶に来られました。折悪しく小生は不在で、上東事務局長がお迎え致しましたが、井上教授と小生との告別式への参列に対し誠に痛み入るお礼を申述べられたあと、「……わずか半年でしたが、寛彰が多摩大学で学生生活を送れたことは、彼の短い人生を本当に充実したものにしてくれました……」とおっしゃったとのこと、小生はそのお言葉を伝え伺って、忝けなさに思わず胸が一杯になりました。

寛彰君が事故で入院していた4日間、同級生は次々に見舞に訪れたことはもちろん、女子学生は交代で徹夜で寛彰君の病床につき添ったそうです。寛彰君が同級生の間でいかに人気があったかを物語るとともに、同級生たちがいかに温かい友情の輪で結ばれているかを私共に示唆してくれた事実ではないでしょうか。他人への温かい思いやりは、能力への自信に基づく“エリート意識”よりも遙かに大切な人間的属性です。

その意味で、今回の横山寛彰君の死は、同君のご両親はじめご一族の方々はもちろん、彼を心から愛した同級生諸君や私共教職員一同にとって大きな悲劇的出来事ではありましたが、多摩大学のためには、末長く語り伝えられるかすかすの美談、また継承されていくべき貴重な精神を遺してくれました。

新生多摩大学の伝統は必らずこうして形成されていく筈です。マスコミがつくり上げた現代の大学生像は、無気力で、自己本位で、軽佻浮薄な若者たちです。だが実はそれらは現代のマスコミそのものの特性であって、よき教育環境下にある大学生の多くは、積極性に富み、自己犠牲をいとわず、温かい気配りのできる若者として育っています。21世紀は正にこうした若者たちによって力強く拓かれていくに違いありません。